



花の上で目をさました子ども

歩いているときに、ふと、いい考えがうかんだり、窓をあけたとたんに、いいおはなしを思いついたことはありませんか。そのいい考えやおはなしは、自分でつくり出したものでしょうか。いいえ、それは、風にのつてどこかからやってきたんです。

おんなの子が、道を歩いていると、道ばたに、タンポポの花がさいっていました。おんなの子は思わず、花のなかをのぞきこみました。そこに、もしかしたら、妖精がひそんでいるかもしれないと思ったからです。

おんなの子が思った小さなかわいい妖精は、いませんでした。でも、かわりに、タンポポの花の上に、小さなおはなしの種が生まれたのです。

タンポポの花の上で、子どもが目をさました。花の子です。

どうしてこんなところでねているのだろうと、あたりを見回していると、風がさあーつとふきました。その風にかれて、花の子は飛んでいきました。

くるーり、くるりと、花の子は、気持ちよく空を飛びました。

木のでっぺんをこえ、やねの上を通りすぎました。そして、マンシヨンの3かいを飛んでいるとき、ちょうど窓をあけたおとこの子のなかへと、花の子は吸いこまれていきました。